先周文化青銅器の研究

――二里岡上層青銅器の先周文化への波及――

飯島武次

はじめに

先に筆者は「先周文化陶器の研究……劉家遺跡出土陶器の検討」と題する論文の中で、[1]高領乳状袋足分襠鬲および双耳罐、腹耳罐などの一群の陶器が、殷墟文化期に併存し、特にその中心が殷墟第三・四期にあることを明かにした。また、「先周文化陶器の研究……周原出土陶器の性格とその検討」の中で武功県鄭家坡遺跡出土の陶器の年代が殷墟文化に併存することを述べ、さらに周原発見の先周文化陶器の多くが、やはり殷墟文化に併存する遺物であると結論づけた。[2]

渭水盆地のいわゆる周原及びその付近において発見された先周時代に属する陶器を観察すると、そこには大きく異なった三つの様式が存在していると認識される。その一は高領乳状袋足分襠鬲を含む一連の陶器群である。その二は高領弧形連襠鬲、直筒形連襠鬲、短領形連襠鬲、高斜領連襠鬲などの連襠鬲群である。その三は殷様式の鬲を含む一連の陶器群である。これら三つの陶器様式はいずれも先周時代に周原ないしはその周囲に存在したであろう諸遺跡から出土し、時には若干の青銅器を伴って出土している。三の殷様式陶器は二里岡文化と殷墟文化に属する陶器にわけられる。この二里岡文化に属する陶器は今日のところ、西安市・藍田県・銅川県を結ぶ南北線以東に分布し、本来的な二里岡文化陶器は周原に至っていない。しかしながら、二里岡文化に属すると考えられるいくつかの青銅器が周原に於て発見されている。

この二里岡文化に属する青銅器は、この時期に属する陶器を伴っていない。筆者は、これらの二里岡文化青銅器の多くは先周文化時代の殷墟文化併存期に埋設されたものと考えている。この小論では、周原に於ける二里岡文化青銅器の性格を考えてみる。

これまでの先周時代青銅器に関する研究は、必ずしも多くはない。李峰氏は「試論陝西出土商代青銅器的分期与分区」の中で[3]、渭河流域出土の青銅器を取り扱っている。李氏は、陝西省内の殷代併存期の青銅器を、第一段階（二里岡上層期）と第二段階（殷墟文化期）の二つの時期に分けている。第一段階青銅器の分布は周原・銅川県・西安市・藍田県などの各地から出土し、それらは殷の文化に属さない遺物と考えていられる。第二段階の青銅器は、出土する地域によって東区（関中東部）、西区（関中西部）、北区（陝北東部）、南区（秦嶺以南）に分けていられる。渭河流域に限って見れば東区と西区が検討の対象となってくるが、東部には殷文化の青銅器が分布し、西部には第二段階第二期の遺物が多く、これは早周（先周）文化に属するとされている。しかしながら、先周青銅器の発展に関しては重要な問題であると述べながらも答えを避けていられる。武者章氏は「先周青銅器試探」において[4]、渭河流域からその多くが出土する斜方格乳釘夔龍紋簋を殷墟第四期併存の先周文化の遺物と結論づけられた。そのとうりであろう。張長寿・梁星彭氏らは「関中先周青銅器文化的類型与周文化的淵源」において[5]、関中の青銅器について述べられている。それによると関中地域の青銅器は、年代の上で二里岡文化から殷墟第一・二期、殷墟第三・四期に相当し、遺物としては殷文化に属するが、青銅器を出土した関中の遺跡は殷の遺跡ではないと考えていられる。これら先学の研究成果を踏まえ、渭河流域の二里岡文化青銅器の埋設された時代および殷式青銅器の先周文化地域への波及状態を明らかにしたい。

陝西省渭河流域における考古学的成果を見れば、龍山文化と西周文化の間に、西周王朝成立以前の周の文化が存在していたであろうことが推定される。周の始祖は、后稷棄であると言われている。后稷は舜によって「邰（𨚕）」に封ぜられ、その四代後の周公劉のころ「豳（邠）」に移ったと言われる。后稷から一三代目の古公亶父（太王）は豳より岐山のもと「周原」に

移り、姜族の女と結婚し、ここに城を築いたと言われている。古公亶父の孫・文王は、「豐」に都し、文王の子・武王はさらに「鎬」を都にしたと記録されている。周は武王の時に殷を破り、覇権を握り西周王朝が成立している。筆者は、劉家遺跡出土の高連乳状袋足分襠鬲を中心とした陶器群の年代を古公亶父の遷岐以降、『武王の』鎬京遷都・西周王朝成立までと考え、また、周原に於て今日確認しえる連襠鬲文化の中心もこの時期にあると考えている。これら高領乳状袋足分襠鬲や連襠鬲文化の年代は、陝西龍山文化と西周文化の間の時代に比定されるものである。渭河中流域の周原、豐京付近で発見されている二里岡文化的な殷様式の陶器群は先周文化に先行する文化に属すると推定され、殷墟文化期に入ってはじめて先周文化が成立したと考えられる。二里岡文化に属する青銅器の一部は、先周文化に先行して周原に達した可能性があるが、二里岡文化青銅器の大部分は先周文化成立後に伝世品として周原に埋設されたと推定される。

本小論では、取り扱う青銅器が二里岡文化から殷墟第一期に併存する時期の遺物と想定されるため青銅器の標準を、二里岡下層、二里岡上層第一期、二里岡上層第二期、殷墟第一期の四つの標準時期に分類して取り扱うことにする。二里岡下層文化の青銅器としては、爵、斝、戈があるが、良好な出土資料は少ない。一九七五年、鄭州市東里路発掘のC八M三二号墓出土の爵、[6]斝や、一九五五年、鄭州市白家荘発見のC八M七号墓出土の爵、戈などの青銅器を一応の標準[7]とする。二里岡上層第一期文化の青銅器としては、盤龍城楼M一号墓・楼M四号墓・李M二号墓、鄭州市銘功路西M二号墓出土の青銅器などを標準とする。二里岡上層第二期文化の青銅器としては、盤龍城楼M三号墓・南M一号墓・李M一号墓、鄭州市白家荘M三号墓・銘功路西M四号墓、輝県琉璃閣M一四八号墓出土の青銅器などを標準とする。殷墟文化に関しては四期編年を採用し、殷墟第一期の青銅器の標準を小屯YM二三二号墓・YM三三三号墓に求める。

一、周原・周城・豐京

先周文化と認識される遺跡が分布する地域の中心は、周城を含む周原地域と豐京地域で、それに涇水の流域も加わる。いわゆる周原は、陝西省にある岐山の東南山麓で、渭河の北岸に広がる台地である。周原の範囲は、今日、中国で一般に考えられている周原の範囲より広く考えるべきで、西は宝鶏・鳳翔県より、東は漆河の流域、武功県付近まで、北は箭括嶺を中心とした岐山の東南山麓、南は渭河までと考えるべきであろう。岐山は標高一六五〇mほどの山塊で、その山麓の標高九〇〇mから四〇〇m付近が、渭河に向かってゆるい傾斜をなし、いく重かの黄土台地を形成している。この黄土台地を切って北から南にむかう何本かの溝や河が存在し、これらの溝や河はすべて渭河に合流する。この周原の中心に周城が存在したと考えられるが、『漢書』地理志の美陽県下注には、

禹貢岐山在西北、中水郷周大王所邑。

と見られ、また『後漢書』郡国志によれば、

美陽、有岐山、有周城。

とあて、後漢から六朝時代に、当時、周城と推定された地が美陽県下に含まれていたと考えられる。『括地志』では、美陽を周城と理解し、

故周城一名美陽城在雍州武功県西北二十里即太王城也。

と言っている。この漢代・六朝の美陽県の位置が判明すれば、周城の位置についても若干の見とうしが成り立つはずである。今のところ美陽県の位置を最終的に決定する確実な資料はない。しかし、漢代瓦などの若干の出土遺物によって、今日の扶風県法門寺（崇正鎮）付近を漢の美陽県とする考えがある。今日の陝西省扶風県法門を美陽県と推定すれば、その西北は、扶風

県召陳村、斉家村、岐山県鳳雛村、賀家村一帯で、ここが周原の中心の周城付近と考えられる。確かに漢代以降、今日に至るまで、陝西省の扶風県、岐山県の境である斉家溝（七星河の上流）の両岸からは、たびたび西周青銅器が発見されている。特に新中国成立後、多くの西周遺跡、遺物が発見されている。周城と推定されるこの地域は、岐山県の当喬家・鳳雛・賀家・礼村・王家、扶風県の張家・斉鎮・斉家・劉家・召陳・任家・康家の各村落を包括する方約三kmの範囲である。

周の文王は、豐京に都し、武王は西周を起こし鎬京に都したと言われている。豐京は灃河の西岸に、鎬京は灃河の東岸の地に比定されている。この豐京の位置について『後漢書』地理志には、

酆在京兆杜陵西南。

と、『詩經』大雅・文王有聲の鄭注に、

豐邑在豐水之西、鎬京在豐水之東。

と見えている。『史記』周本紀正義には『括地志』を引いて、

周豐宮、周文王宮也、在雍州鄠県東三十五里

とも言う。文王が遷都した豐京について、後漢から六朝時代にかけて、おおむね灃河の西岸との考えが定着していたようである。

豐京の地を求めての、灃河西岸における初歩的な考古学調査は、一九三三年、一九四三年に行われているが、[8] 本格的な調査が開始されたのは、一九五〇年代に入ってからである。[9] 今日、豐京の遺跡と推定される地域は、西安市の南西約一四kmの灃河西岸の長安県客省荘、馬王村、張家坡、大原村、馮村、曹家寨、西王村の一帯である。この地域は標高四〇〇m程の平地で、付近には先周以降、西周時代の遺物が多数散布している。また、先周・西周時代の墓、車馬坑、窖蔵、住居址、版築基壇の発見も伝えられている。

二、渭河流域の先周文化早期青銅器

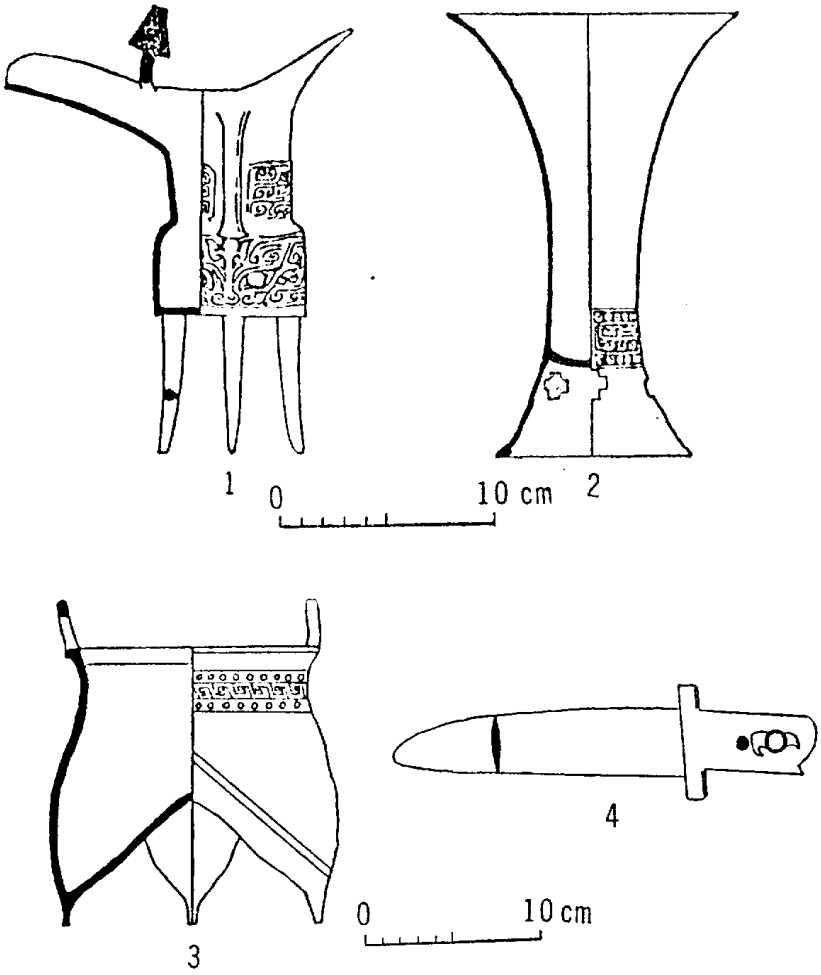
近年来、陝西省などで発見された殷代青銅器の数は相当なもので、また殷代青銅器を出土する遺跡は四〇ヶ所以上になっている。その分布は、渭水盆地を中心として、北は陝北高原、南は漢水流域にいたっている。ここで問題とする青銅器は、周原を中心とした渭河流域で発見された二里岡文化期併存の青銅器であるが、二里岡文化青銅器と伴出する殷墟文化青銅器についても検討する。

渭河流域で発見されている殷代青銅器を出土する遺跡の多くは殷墟文化期に併存するものであるが、その中のいくつかの遺跡は二里岡上層文化に属すると考えられる青銅器を出土している。二里岡上層文化に属する青銅遺物が発見されている遺跡には、岐山県の京当遺跡[10]、扶風県の美陽遺跡[11]、西安市の老牛坡遺跡[12]、田王村遺跡[13]、銅川県の三里洞遺跡[14]、戸県の侯家廟遺跡[15]、武功県の鄭家坡遺跡[16]、藍田県の懐珍坊遺跡[17]などがある。これらのなかで、二里岡文化期に属する青銅器の出土が多く、遺跡の内容も比較的明らかなものは、岐山県京当遺跡、扶風県美陽遺跡、西安市老牛坡遺跡である。

京当遺跡は、岐山県の東部、扶風県との境に近く、七星河の上流に位置している。一九七二年に付近の農民が窖蔵と思われる石積の坑内から五点の青銅器を発見した。発見された青銅器は、爵、觚、鬲、斝、戈の各一点である。報告者が出土現場に調査におもむいた時には、既に石積の窖蔵は破壊されていたという。報告によれば、人骨は無く、これらの青銅器は一つの窖蔵から出土した可能性が強いという。『文物』一九七七年第一二期に報告された京当遺跡の青銅器に関する報告は簡略なものであるが実測図が示され、また『陝西出土商周青銅器（一）』にはこれらの青銅器の写真がある。[18] 京当遺跡出土の青銅器の性格を知るためにこれらの図と写真を基に検討を加えてみよう。

爵（第1図の1）は、二里岡上層文化型の平底爵である。注口が長く、尾は比較的短い。単柱で柱の下は二股に分かれる。

器身は腰部が明確で、口縁部から腰部にかけ把手がつく。紋様帯は上段の腹部と下段の腰部に分かれ、何れにも饕餮紋が施される。底部は平底で、羊角状の三足が付く。大きさは通高二一・九cmである。上段、下段の紋様とも巨眼を配した饕餮紋で、巨眼上には雷紋状の角が見られる（第3図の1）。下段の饕餮紋は上縁下縁の円圏紋に挾まれている。円圏紋を配した饕餮紋帯は二里岡文化青銅器の特徴的紋様である。この平底爵に類似した爵は、河南省輝県琉璃閣一四八号墓出土の爵[19]、湖北省黄陂県盤龍城採集の爵[20]、安徽省嘉山県泊崗引河遺跡出土の爵[21]などが知られる。泊崗引河遺跡の平底爵は器身の作りもしっかりし、足が比較的太く、樽状の柱が付く。泊崗引河遺跡の平底爵の紋様はやはり二段に分かれるが円圏紋は見られず、饕餮紋の巨眼が突出する。京当遺跡の平底爵の柱は傘形で、足も細く、泊崗引河遺跡の平底爵よりは古い形態をとどめている。京当遺跡の平底爵の柱は、盤龍城の物に類似し、饕餮紋と円圏紋からなる紋様帯もよく似ているが、盤龍城の平底爵の足の断面は円形で、羊角状を呈してはいない。京当遺跡の爵の器形は、輝県琉璃閣遺跡の平底爵の器形に類似するが、琉璃閣遺跡の爵の饕餮紋の目は楕円形を呈し、京当遺跡の爵の饕餮紋に見られる巨眼形とは異なる。京当遺跡の平底爵下段の饕餮紋と極めて類似性が高いのは、湖北省随県淅河遺跡発見の觚に見られる饕餮紋である[22]。以上、泊崗引河遺跡、琉璃閣遺跡、盤龍城遺跡出土の平底爵の器形と紋様、淅河遺跡の觚の饕餮紋から、京当遺跡の平底爵の



第1図　岐山京当遺跡出土青銅器 I

第2図　岐山京当遺跡出土青銅器
（1爵、2觚、3鬲、4斝）

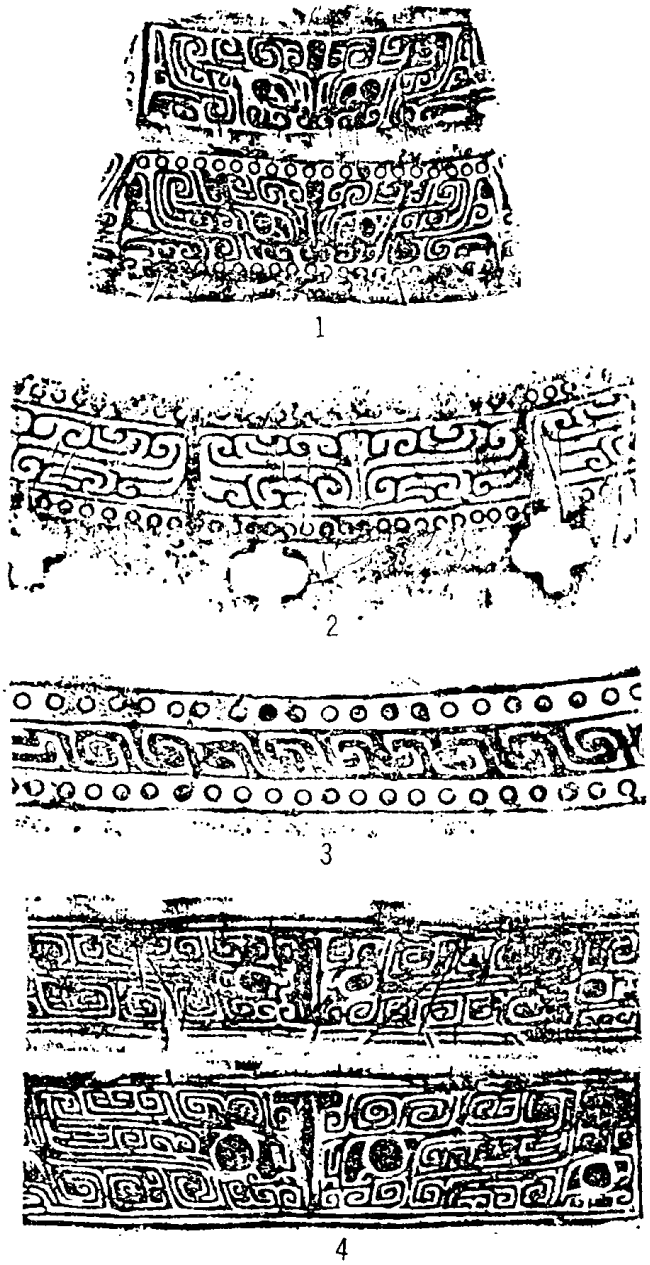
1 | 2
3 | 4

年代を判断すると、それは琉璃閣・盤龍城遺跡の物と概ね同時代の二里岡上層第二期文化の遺物と考えられる。

觚（第1図の2）は、口がラッパ状に大きく開き、器壁は薄く、細い胴部と高い圈足を持つ典型的な二里岡文化の器形である。高さ二一・二cm、口径一四cmの大きさである。圈足部には三方向に十字形鏤孔があき、三段に弦紋が見られる。腰部には円圈紋に挟まれた雲雷紋が存在する（第3図の2）。雲雷紋は隆起線で施された饕餮紋的な図案であるが、巨眼は存在しない。類似した器形と紋様を有する觚としては、鄭州南関外遺跡[23]、白家荘第三号墓[24]出土の物などが知られる。いずれも饕餮紋から変化したと思われる雲雷紋をゆうし、特に南関外遺跡の觚は円圈紋に挟まれた雲雷紋、圈足部の弦紋など、京当遺跡出土の觚と極めてよく類似している。二里岡上層第二期文化同時代の遺物と見て差し支えない。

鬲（第1図の3）は、極めて特徴的な鬲である。口縁部が外反し、口唇部上に半円形縄状の把手がつく。頸部には、円圈紋に挟まれた「ワ」字形紋が連続する（第3図の3）。胴部に最大径があり、胴部から袋足にかけ細起隆線紋の折曲紋が見られ

る。通高二一cm、口径一五・五cmの大きさである。第1図の3と同形の青銅鬲の例を知らない。しかし袋足を有し、袋足の先端が円錐形足となる二里岡上層文化期の鬲には、第1図の3と同じく細起隆線紋の折曲紋が施された例が少なくはない。河南省輝県琉璃閣第一一〇号墓出土の鬲[25]、新鄭県望京楼出土の双十字紋鬲[26]などにそれが見られる。年代的には二里岡上層期の終わりに近い時期と思われる。円圏紋に挟まれた連続する「ワ」字紋は扶風県美陽遺跡出土の鬲（第4図の3、第5図の1）に見られる。新鄭県望京楼遺跡出土の鬲に見られる紋様は、京当遺跡出土の鬲の紋様によく似ているが、連続する「ワ」字紋ではなく、完全な雷紋の形を呈している。いずれにしろ円圏紋に挟まれたこれらの連続ワ字紋は、二里岡上層文化の比較的遅い時期つまり上層第二期に属する遺物であることを意味している。京当遺跡出土のこの鬲に関して特に注意すべき点は、この器形の鬲が、陶器の鬲の器形を写した物で、これまで知られていた青銅鬲に比べ特異なことである。



第3図　岐山京当遺跡出土青銅器拓本
（1爵、2觚、3鬲、4斝）

斝（第2図の4）は、口縁が大きく開き、二本の傘形の柱が付く。胴部と腰部の境界が明瞭で、口縁から腰部にいたる把手が付き、足は太い羊角状の三足である。通高二二・三cm、口径一六・六cmの大きさである。胴部と腰部には二段にわたって饕餮紋が施される。上段の饕餮紋の目は楕円形で下段の饕餮紋の目は巨眼である。饕餮紋周辺の空間は雷紋によ

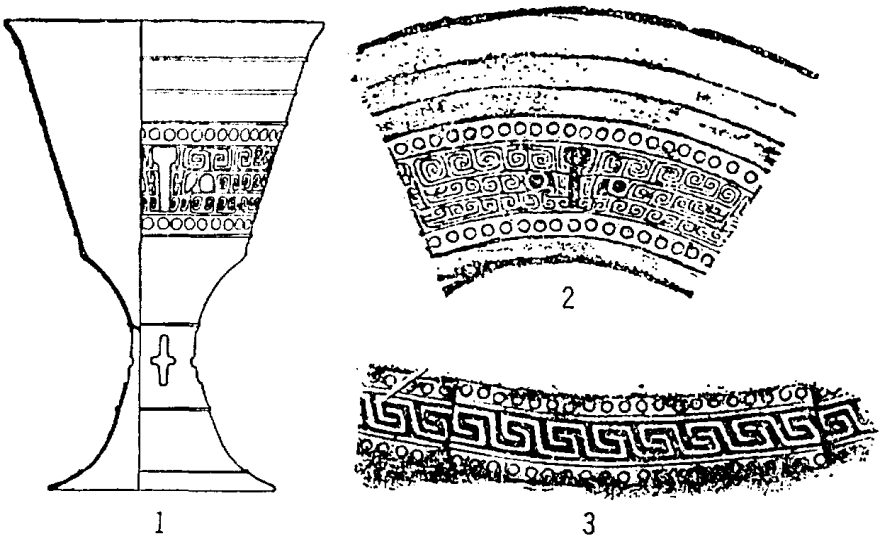
って充塡されている（第3図の4）。報告者はこの斝の年代を殷墟第二期に比定しているが、年代の下げすぎである。鄒衡編年によれば殷墟第一期というところであろう。[27] 林巳奈夫氏は京当遺跡の斝の饕餮紋を引用し、それを殷中期2とする。[28] 京当遺跡の斝に関しては、研究者間の年代観に若干のずれがあると言わざるおえないが、さきの平底爵、觚、鬲よりは年代が若干下がるようである。この斝の年代は二里岡上層第二期文化最末期から殷墟第一期と言うところであろう。

戈（第1図の4）は、直内で、上下段に欄がつき、内中央に一孔があき、巨眼紋が施されている。援は偏平で、辺稜、中脊とも明瞭ではない。この戈は、渭河流域で発見された戈のなかでは最も古い遺物の一つと見ることができる。京当遺跡出土の戈は、二里岡上層文化に属する鄭州市銘功路西第二号墓や輝県琉璃閣第一一〇号墓発見の戈の形に近いが、[29] また、殷墟文化期に属する安陽殷墟西区AGM六九二号墓出土の戈にも類似した遺物がある。[30] この種の戈の器形をもっての年代決定は難しいが、二里岡上層文化の戈は、概して援と内の間の「関」の段が小さく、京当遺跡の戈も関の段が小さい部類に入るであろう。

以上、京当遺跡出土の青銅爵、觚、鬲、斝、戈に関して筆者の年代観を述べた。それぞれの青銅器に若干の年代幅があるものの、全体としては、二里岡上層文化の比較的遅い時期つまり上層第二期の遺物と考えることができる。従って同一時期の遺物が同じ窖蔵に埋設されていたと考えてよいであろう。報告者は、斝を殷墟第二期の遺物と考え、これら五点の青銅器埋設時期を殷墟文化期と考えられたようであるが、それほど遅い時期の物ではない。鄒衡教授は京当遺跡の遺物を氏の編年による商文化第四段第七組（陝西商代第二期）と結論付ていられる。[31] 妥当なところであろう。

次に扶風県美陽遺跡出土の青銅器について検討してみよう。[32] 扶風県法門鎮美陽において、一九七三年に墓の副葬品であると考えられる一群の青銅器が発見された。それらの青銅器には、鼎、鬲、簋、卣、高足杯、斧、錛、鑿があったが、そのなかの、鬲、高足杯は二里岡上層文化に属する遺物と考えられる。

鬲（第5図の1）は、袋足状の三足を有し、足の先端は円錐形を呈する。口縁は外反し、口唇部に対になる半円形の把手が付く。頸部には円圏紋に挾まれた連続「ワ」字形紋が存在し、袋足部には細起隆線の折曲紋が施されている。通高一八・九



第4図　美陽遺跡出土青銅器

第5図　美陽遺跡出土青銅器（1鬲、2高足杯）　1｜2

cm、口径一四cmの大きさである。この紋様の構成は、京当遺跡出土の鬲の紋様構成と同じである。同形の鬲が、新鄭県望京楼遺跡や鄭州市白家荘遺跡第三号墓から出土している。[33] この鬲は二里岡上層第二期に属する遺物と考えられる。

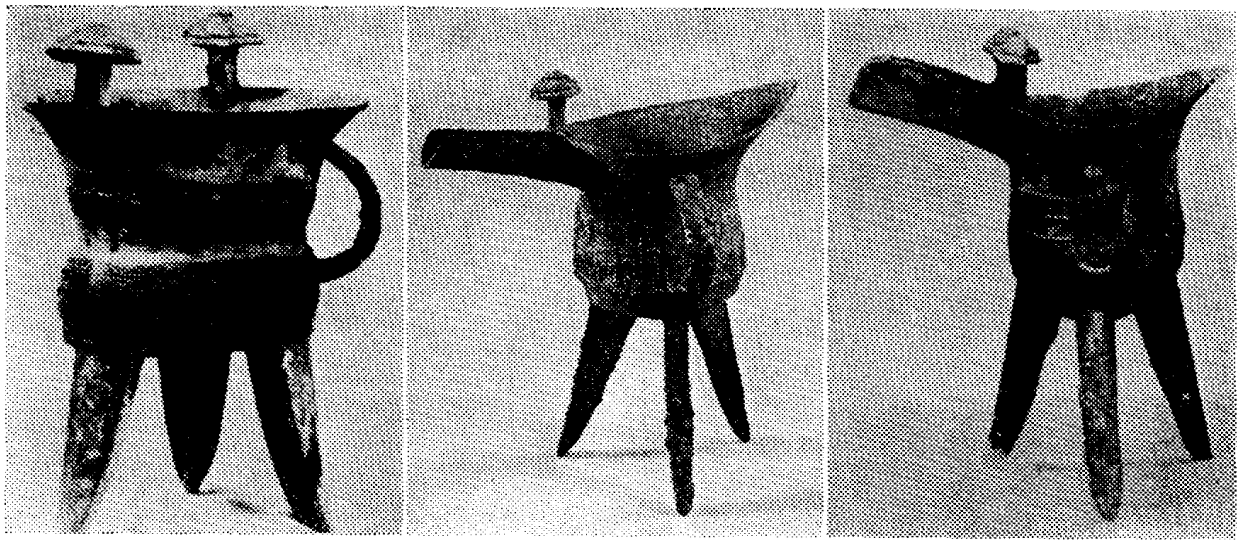
高足杯（第4図の1、第5図の2）は、杯部がラッパ状を呈し、高圏足を有する。圏足には縦長の十字鏤孔が四つあき、鏤孔を挾んで凸弦紋が施される。杯口縁部には二本の弦紋がみられ、腹部には円圏紋帯に挾まれた饕餮紋と雷紋が見られる。通高二〇・八cm、口径一四・三cm、杯の深さ一三・八cmである。この種の高足杯は、殷の領域であった河南省方面からは出土していない。この器の年代に関して、『陝西出土商周青銅器（一）』は、[34]「商代中晩期」とする。この商代中晩期の意味は、同書が、京当遺跡の青銅器を商代早期（二里岡上層文化）としている点から考えると、殷墟文化期のある時期を意味していると思われる。李峰氏は、この高足杯を二里岡上層文化の遺物としてあつかっている。[35] この高足杯に見られる饕餮紋と雷紋に類似した紋様も少ない。林巳奈夫氏は、西周期の遺物として取り扱うが、[36] これには問題がある。この高足杯の器形は、圏足部の弦紋、鏤孔の風

格など、総じて二里岡上層第二期文化に属する觚の様相を呈しているが、この種の細かな雷紋（第4図の2）は殷墟文化中に顕著に見られるものである。従って、この高足杯の年代決定は極めて難しい。二里岡上層第二期文化から殷墟第三・四期に至る各時代が可能性をもっている。しかしながら、あえて筆者の考えを述べれば二里岡上層第二期文化から殷墟第一期文化に到る間の遺物としたい。

美陽遺跡からは、ほかに鼎、簋、卣が発見されている。林巳奈夫氏は、鼎と卣の年代に関して、これを氏の殷後期2に比定されている。概ね正しいであろう。美陽県出土の鼎と同器形の鼎は、岐山県王家嘴遺跡からも出土している。残りの簋は、最も新しい遺物で、美陽遺跡にこれらの青銅器が埋設された最終的な年代を示す資料と考えられる。美陽遺跡のこの簋（第6図）は、圏足を有す無耳形で、器身には斜方格乳釘紋がほどこされ、口縁部には夔龍紋が、また圏足には饕餮紋が見られる。報告者は、この簋を殷後期としている。武者章氏は「先周青銅器試探」で、「斜方格乳釘夔龍紋簋」を取扱、その年代を殷墟第四期併存と考えられた。斜方格乳釘夔龍紋簋の圏足は一般に「ハ」の字形に開くが、美陽遺跡出土の簋の圏足は反りのある「八」の字形に開き、作りもよい。斜方格乳釘夔龍紋簋よりは年代が下るものと考えられ、西周期に入ってからの遺物であろう。報告では、鼎を商代中期、簋と卣を商代後期としている。報告においても簋の年代が一番下がっていることに変わりはない。美陽遺跡の個々の青銅器の年代には、かなりのずれがある。鬲の年代は二里岡上層第二期文化に属し、高足杯は二里岡上層第二期から殷墟第一期の間に推定される。しかし、鼎と卣は殷墟第二期を中心とした殷墟文化期に考えられ、最も遅い簋は西周期に入っている可能性が高い。従って美陽遺跡の一群の青銅器の埋設時期は殷墟第四期以前に遡りえない。

第6図　美陽遺跡出土青銅簋

老牛坡遺跡は、陝西省西安市の東一三kmの灞河北岸に位置している。[37] 一九七二年の初め、この遺跡から青銅器一三点、陶器二点が発見された。これらの遺物の出土状況は必ずしも明らかでないが、青銅器としては斝一点、爵二点、戈一点、鉞一点、



第7図　西安老牛坡遺跡出土青銅器（1斝、2爵、3爵）　1｜2｜3

削一点、二穿刀一点、鏃三点、錛一点、斧一点、鑊一点があった。これらの青銅器は二里岡文化の青銅器であるが、斝、爵が特に注目される。

斝（第7図の1）は、大口、平底で、二本の柱と把手、三足がつく。柱上の傘には渦紋が施され、腹部と腰部に円圏紋に挾まれた饕餮紋と雷紋帯が存在する。通高二三cm、口径一五cmの大きさである。この斝に類似した器形の青銅斝の例は、比較的多く、二里岡上層第二期の湖北省黄陂県盤龍城遺跡李家嘴M一号墓や殷墟第一期の河南省安陽市殷墟小屯YM二三二号墓から出土している。盤龍城李M一号墓の斝の器形は、第7図の1の斝によく似るが、腰部の紋様は渦紋で、老牛坡遺跡の饕餮紋のある斝とは紋様が異なる。しかし年代的には連続する時代の遺物である。上海博物館の青銅斝には、老牛坡遺跡出土の斝に大変よく似た遺物があり、やはり二里岡上層第二期から殷墟第一期の遺物と考えられる。

雷紋爵（第7図の2）は、平底爵の類で、注口は細く、単柱と把手がつき、羊角状の三足がつく。腹部には、細隆起線からなる雷紋が二段に施される。通高一六・八cmの大きさである。この青銅爵の特色は、腹部に施された細線の雷紋であるが、このような細線の雷紋は、美陽遺跡出土の高足杯にも見られる。二里岡上層第二期から殷墟第一期に至る時代の遺物と推定されるが、類例は少ない。

弦紋爵（第7図の3）は、深腹、円底で、羊角状の三足がつき、傘形の柱を持つ。腹部には三本の横弦紋があり、傘には渦紋がほどこされる。通高一七・二cmの大きさである。報告書はこの弦紋爵の年代を二里岡期から殷墟第一期と述べるがいささか古

すぎる。この第7図の3の弦紋爵は、殷墟小屯YM三八八号墓出土の弦紋爵に類似する。小屯YM三八八号墓の爵の年代を林巳奈夫氏は殷中期2とし、鄒衡氏は殷墟第二期とする。[38] この器形と紋様の爵の年代決定には問題が残るが、概ね殷墟第一・二期の遺物と考えておく。

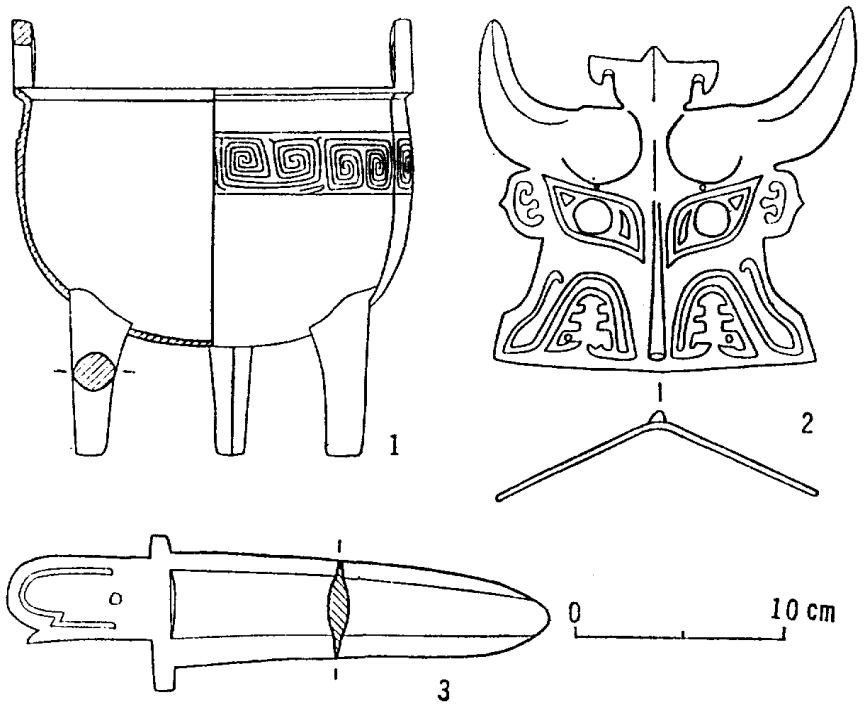
老牛坡遺跡に於いては、一九八六年にも発掘が行われ、多くの青銅器が発見されている。[39] 発見された青銅器には、鼎一、觚二、爵二、斝一、戈六、鉞二、斧五、鑿一、錐一、鏃七八、人面形飾三、牛頭形飾三、小獣面飾三九点のほか鳥獣形飾、車馬具などがあった。その中で報告書に図の示されているM一〇号墓とM四四号墓の青銅器について検討してみる。

M一〇号墓からは、青銅鼎一、斧二、戈一、牛頭飾一、鏃九点と玉管一、陶鬲三点が副葬品として出土している。

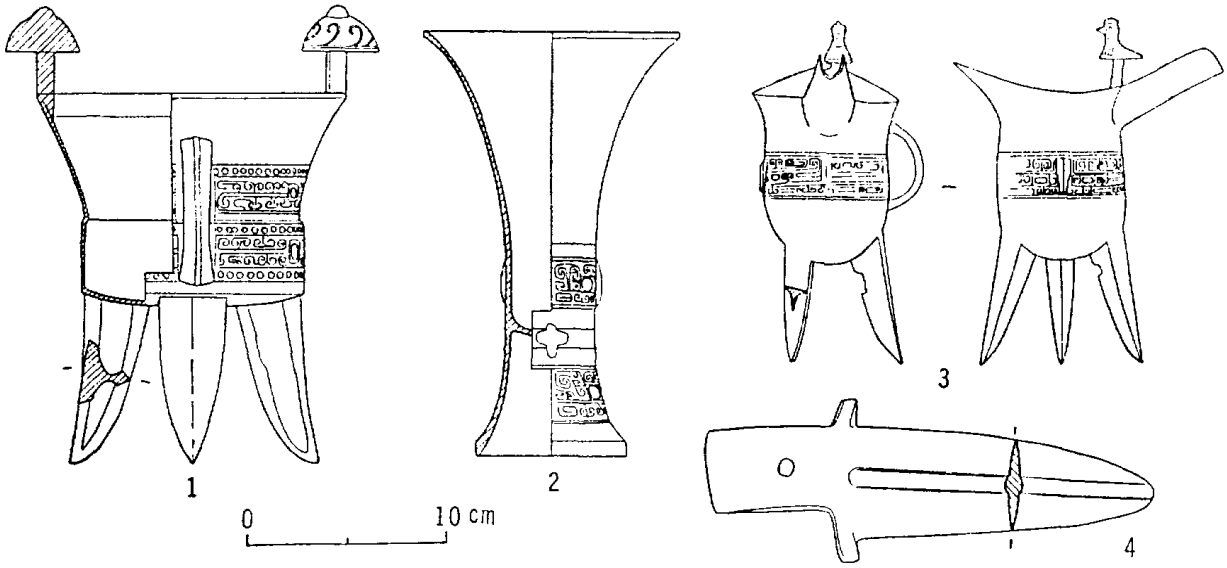
鼎（第8図の1）は、口縁が「く」字形を呈し、鼓腹、円底の器身で、柱形の三足がつく。腹部には雷紋帯が一周する。通高二一cm、口径一七cmの大きさである。この器形は、美陽遺跡出土の鼎に近いが、作りが原始的で美陽遺跡の物よりは古く感じられる。林巳奈夫氏はこの種の鼎を総て殷墟1としていられる。年代的には二里岡上層第二期や殷墟第一期に引き続く時代の鼎と考えられ、殷墟第一期に前後する遺物であろう。

戈（第8図の3）は、京当遺跡の戈（第1図の4）に類似するが「関」が大きく、殷墟第一期以降の物であろう。

このM一〇号墓からは陶鬲が出土し、その年代は器形の編年の上から、殷墟第一・二期に比定される。M一〇号墓出土の遺



第8図　西安老牛坡M10号墓出土青銅器



第9図　西安老牛坡M44号墓出土青銅器

物を総合的に考えるとこの墓の年代は、明らかに殷墟第一期に求められる。

老牛坡遺跡M四四号墓からは、青銅斝、觚、爵各一点、戈二点、銅鏃五点の青銅器が出土している。

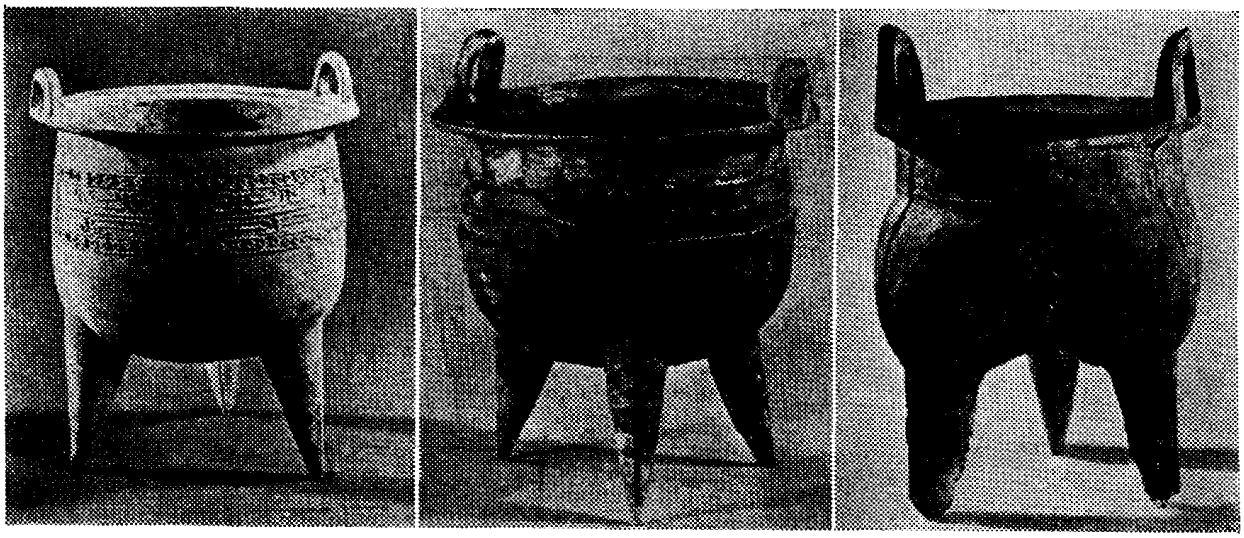
斝（第9図の1）は、口縁が開き、平底で、把手、二本の傘形柱がつき、足は断面「T」字形を呈する太い三足である。腹部と腰部には円圏紋に挟まれた夔龍紋が施されている。通高二三cm、口径一五cmの大きさである。殷墟第一期に属する小屯YM二三二号墓からは、類似した斝（二三二・二a、二三二・三）が出土している。

觚（第9図の2）は、細身で、高圏足である。対になる十字鏤孔と突稜がつく。腹部と圏足部には、弦紋に挟まれた饕餮紋がつく。通高二一・四cm、口径一二・八cmの大きさである。類似した觚が、小屯YM二三二号墓から出土している。

爵（第9図の3）は円底爵である。鳥形の単柱が付き、足は断面「T」字形の細い足である。腹部には饕餮紋状の雷紋がほどこされる。通高二三cmの大きさである。殷墟第二・三期の遺物に近いと思われる。

戈（第9図の4）は直内形で、中脊は帯状に隆起している。上辺、下辺に欄が存在するが、関は下辺のみにみられる。通長二五・八cmの大きさである。この戈も殷墟第一・二期の遺物と思われる。

M四四号墓の青銅器は概ね殷墟第一期ないしは第二期に属する遺物である。報



第10図　青銅鼎（1三里洞、2懐珍坊、3田王村）　1｜2｜3

告ではM四四号墓の年代を大司空村第一期としているがまずまずのところであろう。

陝西省内渭河流域から出土している二里岡上層期から殷墟第一期に属すると考えられるその他の青銅器は、必ずしも出土状況がはっきりしていない。その多くは既に紹介した京当遺跡、美陽遺跡、老牛坡遺跡出土の爵、斝、觚、鬲、戈などに類似する遺物であるが、銅川市三里洞遺跡、藍田県懐珍坊遺跡、西安市田王村遺跡からは、円錐足の付いた円底鼎や鬲鼎が、発見されている。

第10図の1の雲雷紋鼎は、銅川市三里洞遺跡出土の遺物である。[40] 口縁部は直角に外折し、対になる半円形の把手が付く。円底の器身には円錐形の三足が付き、円圏紋に挟まれた饕餮紋状の雲雷紋が施されている。通高一九cm、口径一五cmの大きさである。この鼎の器形は、白家荘M二号墓の鼎に類似し、紋様は白家荘出土の斝（豫〇八九五）の紋様に近い。また盤龍城李家嘴M二号墓からも類似した青銅鼎が出土している。二里岡上層第二期に属すると考えられるが、ことによると二里岡上層第一期まで遡る可能性もある遺物である。

第10図の2の弦紋鼎は、一九七三年に藍田県懐珍坊遺跡で出土した遺物である。口縁部は直角に外折し、対になる半円形の把手が付き、三足は円錐形である。腹部には三本の弦紋が施される。通高一八cm、口径一五・八cmの大きさである。鄭州市の遺跡からは鄭博〇〇五八鼎などいくつかの類似品が出土している。小屯YM三八八号墓でも弦紋鼎が出土しているが、器身腹部が鼓腹で年代の下がる遺物と思われる。殷墟第二期に属する遺物であろう。懐珍坊遺跡の弦紋鼎をあえて古く考えれば、二里岡上層

第一・二期まで遡るかもしれない。

第10図の3の鬲鼎は、一九五六年、西安市田王村遺跡出土の遺物である。口縁が筒状で対になる半円形の把手が付き、腹部は三つの袋足に分かれ、足は柱形である。袋足部には隆起線による折曲紋が施される。類似した鬲は、岐山からも出土している（岐一一）。鄭州市楊荘遺跡からも、一九五四年に類似した鬲鼎二点が出土している。二里岡上層第二期に属する遺物であろう。

三、結　論

以上検討してきた陝西省内渭河流域出土の早期青銅器の年代は、基本的に二里岡上層第二期から殷墟第一期に至る遺物であった。いまのところ、西安市以西に於いて、二里岡上層第一期以前に遡る可能性のある青銅器は、銅川市出土の雲雷紋鼎が知られる程度である。

青銅器の埋設時期が二里岡上層第二期以前まで遡る可能性のあるのは、京当遺跡の場合だけである。美陽遺跡の場合は鬲が二里岡上層第二期に属する遺物であったが、最も遅い青銅器は殷墟第四期から西周に至ると考えられ、先周時代末期の遺跡と認識される。老牛坡遺跡の青銅器には、二里岡上層第二期の遺物が含まれるが、殷墟第一期に埋設されている可能性が高く、また、M一〇号墓などは、殷墟第一期の典型とも言える。銅川市の雲雷紋鼎自身は古い器形であったが、伴出した遺物の状況が不明で、埋設された年代も分からない。このような状況で、周原地域の先周早期青銅器の多くが殷墟第一期文化以降の遺物と関連をもって出土している。従って周原地域に殷文化の影響が及んだのは、殷墟第一期文化以降と考えられ、殷墟文化期に入ってから本格的な殷文化の波及があったと推定される。

しかし、すでに二里岡上層第二期段階に、周原に殷式青銅器が僅かではあるが波及していた可能性は高い。周原地域では二

里岡文化陶器がほとんど発見されていないことから見て、周原への殷式青銅器の波及は殷式陶器の波及よりも一時期早かったといえる。二里岡上層第二期文化時期に殷式青銅器の一部が周原に波及し、その後、殷墟第一期以降に伝世された二里岡上層期の青銅器が殷墟文化期の青銅器と共に埋設されたと推定される。殷文化の波及を受けて殷墟第一期ごろ渭河流域に於いて先周文化の誕生が開始され、その後、殷墟第三・四期併存期に至って、周文化としての先周文化が確立したと推定される。陶器の面では、殷墟第三・四期併存期以降の周原に、明らかに周型の陶器器形が存在している事については既に述べた通りである。[41] 青銅器の面においても殷墟文化のある時期（殷墟第三・四期）以降、周型の青銅器が出現したものと推定され、確かに少なからずそのような遺物を目にすをが、周型の青銅器については後日改めて検討したい。

今日までに発表された発掘報告書を見る限りに於いて周原地区には、二里頭第三・四期併存と思われる青銅器、二里岡下層青銅器は見あたらない。さらに陝西龍山文化以降二里岡下層にいたる間の考古学的遺跡・遺物の欠落を認めざるをえない。しかしこれは、この地区にこの時期の文化が欠落していたことを意味するのではなく、あくまでも考古学的研究の欠落を意味するものである。

このような諸状況は、陶器の面から先周文化を考えた「飯島武次、一九八八論文」（文献1）、「飯島武次、一九九〇未刊論文」（文献2）の結論とも一致している。

おわりに

「先周文化陶器の研究……周原出土陶器の性格とその検討」（文献2）に於いて二里岡期から殷墟第一期にいたる陶器の検討を試みたが、紙面の関係上この時期の青銅器に論を及ぼすことができなかった。先周文化の性格を考える上で陶器と青銅器の関係は表裏一体とも言える。既に発表した二つの論文を補足する意味で、本論で先周文化早期の青銅器の問題を取り扱っ

た。なお、先周文化成立後の先周文化晩期の青銅器については別の機会に持論を述べてみたい。

この研究課題に関しては、北京大学鄒衡教授、李伯謙教授から御指導をいただいている。また、徐天進君から多くの情報と資料提供をうけている。記して謝意を表したい。本論文は、一九八八年度、駒澤大学特別研究助成金「先周・西周時代青銅器と陶器の考古学研究」の成果の一部である。

註

(1) 1 飯島武次、一九八八。
(2) 2 飯島武次、一九九〇未刊。
(3) 28 李峰、一九八六。
(4) 25 武者章、一九八九。
(5) 16 張長寿・梁星彭、一九八九。
(6) 26 楊育彬・趙霊芝・孫建国・郭培育、一九八一。
(7) 4 河南出土商周青銅器編輯組、一九八一、図版一七、一八、一九。
(8) 7 徐炳昶・常恵、一九三三。石璋如、一九四九。
(9) 15 中国科学院考古研究所、一九六二。
(10) 23 宝鶏市博物館・王光永、一九七七。
(11) 21 扶風県文化館・羅西章、一九七八。
(12) 24 保全、一九八一。11 西北大学歴史系考古専業、一九八八。
(13) 13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九。
(14) 18 銅川市文化館、一九八二。
(15) 13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九。
(16) 22 宝鶏市考古工作隊、一九八四。
(17) 27 藍田県文化館・樊維岳、陝西省考古研究所・呉鎮峰、一九八〇。
(18) 23 宝鶏市博物館・王光永、一九七七。13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九。

(19) 14 中国科学院考古研究所、一九五六。
(20) 6 湖北省博物館、一九七六。
(21) 3 葛治功、一九六五。
(22) 8 随州市博物館、一九八一。
(23) 4 河南出土商周青銅器編輯組、一九八一。
(24) 5 河南文物工作隊第一隊、一九五五。
(25) 14 中国科学院考古研究所、一九五六。
(26) 4 河南出土商周青銅器編輯組、一九八一。
(27) 9 鄒衡、一九六四。
(28) 20 林巳奈夫、一九八六。
(29) 17 鄭州市博物館、一九六五。14 中国科学院考古研究所、一九五六。
(30) 4 河南出土商周青銅器編輯組、一九八一。
(31) 10 鄒衡、一九八〇。
(32) 21 扶風県文化館・羅西章、一九七八。
(33) 4 河南出土商周青銅器編輯組、一九八一。5 河南文物工作隊第一隊、一九五五。
(34) 13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九。
(35) 28 李峰、一九八六。
(36) 19 林巳奈夫、一九八四。20 同、一九八六。
(37) 24 保全、一九八一。11 西北大学歴史系考古専業、一九八八。
(38) 19 林巳奈夫、一九八四。9 鄒衡一、九六四。
(39) 11 西北大学歴史系考古専業、一九八八。
(40) 18 銅川市文化館、一九八二。
(41) 1 飯島武次、一九八八。2 飯島武次、一九九〇未刊。

図出典目録

第1図　23 宝鶏市博物館・王光永、一九七七、図2。
第2図　13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九、図7・6・9・8。
第3図　23 宝鶏市博物館・王光永、一九七七、図1。
第4図　21 扶風県文化館・羅西章、一九七八、図4・9・5。
第5・6図　13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七八、図41・43・44。
第7図　24 保全、一九八一、図版8の1・2・3。
第8・9図　11 西北大学歴史考古専業、一九八八、図12・17・21。
第10図　13 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九、図3・52・1。

引用文献目録

1、飯島武次、一九八八、「先周文化陶器の研究……劉家遺跡出土陶器の検討」(『考古学雑誌』第七四巻第一号)。
2、飯島武次、一九九〇未刊、「先周文化陶器の研究……周原出土陶器の性格とその検討」(『北京大学考古系紀要』)。
3、葛治功、一九六五、「安徽省嘉山県泊崗引河四件商代銅器」(『文物』一九六五年第七期)。
4、河南出土商周青銅器編輯組、一九八一、『河南出土商周青銅器』(北京)。
5、河南省文物工作隊第一隊、一九五五、「鄭州市白家荘商代墓葬発掘簡報」(『文物参考資料』一九五五年第一〇期)。
6、湖北省博物館、一九七六、「盤龍城商代二里岡期的青銅器」(『文物』一九七六年第二期)。
7、徐炳昶・常恵、一九三三、「陝西調査古跡報告」(『国立北平研究院院務彙報』第四巻第六期)。
8、随州市博物館、一九八一、「湖北随県発現商代青銅器」(『文物』一九八一年第八期)。
9、衡衡、一九六四、「試論殷墟文化分期」(『北京大学学報……人文科学』一九六四年第四・五期)。
10、衡衡、一九八〇、『夏商周考古学論文集』(文物出版社、北京)。
11、西北大学歴史系考古専業、一九八八、「西安老牛坡商代墓地的発掘」(『文物』一九八八年第六期)。
12、石璋如、一九四九、「伝説中周都的実地考察」(『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第二〇本下冊)。
13、陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、一九七九、『陝西出土商周青銅器(一)』(北京)。

14、中国科学院考古研究所、一九五六、『輝県発掘報告』（『中国田野考古報告集』第一号、北京）。
15、中国科学院考古研究所、一九六二、『灃西発掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第一二号）。
16、張長寿・梁星彭、一九八九、「関中先周青銅器文化的類型与周文化的淵源」（『考古学報』一九八九年第一期）。
17、鄭州市博物館、一九六五、「鄭州市銘功路西側両座商代墓」（『考古』一九六五年第一〇期）。
18、銅川市文化館、一九八二、「陝西銅川発現商周青銅器」（『考古』一九八二年第一期）。
19、林巳奈夫、一九八四、『殷周時代青銅器の研究』（『殷周青銅器綜覧（一）』吉川弘文館、東京）。
20、林巳奈夫、一九八六、『殷周時代青銅器紋様の研究』（『殷周青銅器綜覧（二）』吉川弘文館、東京）。
21、扶風県文化館・羅西章、一九七八、「扶風美陽発現商周銅器」（『文物』一九七八年第一〇期）。
22、宝鶏市考古工作隊、一九八四、「陝西武功鄭家坡先周遺址発掘簡報」（『文物』一九八四年第四期）。
23、宝鶏市博物館・王光永、一九七七、「陝西省岐山県発現商代銅器」（『文物』一九七七年第一二期）。
24、保全、一九八一、「西安老牛坡出土商代早期文物」（『考古与文物』一九八一年第二期）。
25、武者章、一九八九、「先周青銅器試探」（『東洋文化研究所紀要』第一〇九冊）。
26、楊育彬・趙霊芝・孫建国・郭培育、一九八一、「近幾年来在鄭州新発現的商代青銅器」（『中原文物』一九八一年第二期）。
27、藍田県文化館・樊維岳、陝西省考古研究所・呉鎮峰、一九八〇、「陝西藍田県出土商代青銅器」（『文物資料叢刊』三）。
28、李峰、一九八六、「試論陝西出土商代銅器的分期与区分」（『考古与文物』一九八六年第三期）。

（日本駒澤大学文学部教授）